

三十四 小小説拾遺二 暈の上で死ぬ

今回の話は、話者の語り口が前とは違い、話題も聞き耳を立てるほどめずらしくはない。しかし、人の死に方が昔とは様変わりして、死に対する人々の対応の仕方が変化したことは、人間という生き物の奇妙さを語っていると言えなくもないので、採録することにした。

暈の上で死ぬという言葉はいつごろからあるのじゃろうか。耕作者のいる田地から武力で地代をとって身過ぎする武士や騎士は、日本でも西洋でも、身を立てるのに死を恐れないうことを誇りにした。侍の私闘は古くからあったに違いないが、歴史の年表をめくると、最初の武家政権が倒されるころから戦国の世が終わるまで、戦いの記述は途絶えることがない。武士の一族をさかのぼれば、たいていだれかが戦場に果てたという言い伝えが残っていたはずじゃ。戦国時代に戦場に出るようになった者も、戦闘を職業に選んだのだから、以前よりもぶっそうな生き方をするようになったのだ。それが、戦国時代が終わると、二つの乱を除けば、年表に戦いが載らなくなる。学者が言うには世界史上でもめずらしい平和な時代だそう。軍人が職業替えをして行政官になったのじゃが、武士たちは、身分

を表わす大小の刀を腰にさすことをやめなかったね。マルクス主義者の言い方にならえば、暴力による支配者であることをいつも表示していたのだ。武士道とやらいうものが唱道されるようになったのは、そういう平和な時代になってからじゃ。西洋でも騎士道が賛美されたのはあとの時代だが、西洋人のなかにはセルバンテスのように、それを笑いとぼす人が出たから偉いね。

「戦闘がなくてもいつも武装している者は、安穩な死に方をしないかもしれないと覚悟する必要がある。辺境の地を切り取っていった歴史をもつ大国で、治安の悪かったその開拓時代の習慣から銃を所持することが許されていて、今の時代にもときどき撃たれて殺される人が出ることを聞いたことがあるじゃろう。その国では、いざというとき銃で身を守る権利があるとされている。そちらの国に銃で落命する確率が高いという考慮があるのか知らないが、こちらの国の武士道には、死の覚悟についての一項が書きこまれていたよ。武士道をたてまえとして刀を帯びていると、実際に、刀が武士の命を奪う出来事がときどき起きたが、本心では、行政官として無難に職を務めて畳の上で死にたい。それで、畳の上での往生が、庶民に限らず普通のことになったのだな。」

もちろんお前さんにも分かるとおり、「畳の上」は比喻というやつだ。西洋ならさしず

めベッドの上だね。洋の東西を問わず、貧乏でわらの上だとしても、家族に看取られて息を引きとるのは暈の上での往生だ。問題はその往生の中身だがね。骨が折れるからそのむつかしいところは敬遠して、人々がどう対応したかを考えてみよう。葬送のやり方が、昔と今では大きく変わったことが知られる。

じつは、葬送は人が死ぬ前から始まる。ゴリオじいさんがもうだめだとなったら、神父が呼ばれただろう。西洋の時代物の映画で、神父が油を塗ったり水を散らしたりするのを観たことはないかね。死に水は西洋にも東洋にも共通するのだ。すると、ずいぶん昔、人が東の列島へ陸伝いに渡ってきたよりも前、リングゴを初めて食った太古からの風習かもしれない。お前さんは、死に水は死者に対するものだと思っているじゃろう。ところが、神父や牧師は、死にゆく人がまだ息のあるうちに来た方がよい。僧が臨終の人に信仰を確認させてその人が往生しつつかあることを自覚できるように、まだ意識が残っていればもつとよい。これはキリスト教だけのことを言っているのではないよ。昔はこの国の仏教でも同じことをしていた。逝く人が往生するつまり極楽へ行く儀式なのだ。だから、暈の上で死ぬのは、たいへん意味があることだったのだ。

したがって信仰の上からは、死後の葬送は儀式に過ぎないことになるな。ところが、臨終に僧を呼ぶ風習がしだいにすたれ、死んでもいないのに僧が来るなんて縁起でもないと

言う人ばかりになった。そう言う人は、僧を呼ぶのが正式だったことを知らず、縁起とは因縁生起という仏教の世界観を意味する言葉で、この世で起きることは縁起によるのだという真理に無知なことを公言しているのだなあ。まことに末世になったものだ。

というしだいで、死んだ人を棺に入れて形骸化した儀式をするようになった。葬儀にお金のかかることは、昔もそうだったので文句を言う筋合いはない。すっからかんのゴリオじいさんを弔うにも、お坊さんや墓堀人に払うお金が要ったからね。この国の昔の棺は人がかつく桶で、鳥辺山に運んで茶毘に付すのは手間がかかるからたいい土に埋めたのが、膝を抱いて座るよりも横たわった方が楽だろうというので大ぶりの寝棺に変わり、合理化つまり形骸化は衛生面からも進んで、死んだ人を焼いて骸骨だけにするのが決まりになった。お金はよけいかかるね。自分の葬式代を準備する人まで出る始末じゃ。

ここに不思議なのは、この間に医療は高度に発達したのに、わしが歳をとったころには自分の家の畳の上で死ぬ人がまれになったことだ。どこで死ぬかって？ 病院というところだ。枕元には僧の代わりに医者があるね。医者は、往生を説くことはないが、死亡診断書を書いて引導を渡す。人の死に方がまた大きく変わったのだ。いつのころからか、テレビで事故を報じるときに心肺停止という言葉を使うようになった。うかつなわしは、最初、

医者が早く駆けつけなければ助かるのだと勘違いしていたよ。ところがそうじゃなかった。人が死んだかどうかは、医者が判定するのを待つんだ。昔なら道に村人の知らない人が斃れていて、息をせず脈もなかったら土に埋めたじやろうが、そんなことを無断ではいけないことになったのだ。幸運に暈の上で亡くなった人がいても、お坊さんを呼ぶ前にお医者さんに来てもらって、死亡診断書を書いてもらわなければ葬式を出せないのだ。これでは、もう先がないとなったら、あらかじめ病院へ連れて行った方がよいと考える人が出て、不思議じゃない。

(ここで話者は少し居ずまいを正して話し始めた) いや、もつとまじめに考えよう。世界を観るレンズの研磨師だった賢者は「自由の人は死について思惟すること少なく、彼の知恵は生についての考察である」と説いたけれども、わしも高齢になったのでときどきそのことを考えるのだ。

家族のなかに病人が出れば、少しでもよくなつてほしいと思うのは人情だ。だれでも治療のいきとどく病院へお願いするのはあたりまえだな。そして病状が進んだら進んだで、一日でも長生きしてほしいと心配することになる。だから、病院が整備された時代になると、人がたいてい病院で亡くなるのは必然の事態だ。考えてみれば、人はそうあっさりと

死ぬわけではない。孤独に生きる道を選んだ良寛禪師も亡くなる前に下痢の症状が出て、身のまわりを世話する人が必要になった。人間が死に臨むとき、医療の世話も介護も必要だというのは宿命なのだ。ところが、ほとんどの人が病院で死を迎えるようになって、臨終の人に対する家族の負担は大きく減った。すると、病気になる人は家族のためにも進んで入院することになる。こうして、人が死んだら、どこの病院で？と問うのが普通の会話になった。

人の死にはずいぶん変化した。僧が来て自分が死につつあることを知った時代と違ってきた。いっしょに住んで日常的に身のまわりにあった死を見つめる機会が減り、また、死が病院でとても管理されるようになったので、多くの人が死を上滑りに観るようになった。ことに子供たちは、死を目の当たりに見て、知らず知らずに、死すべき定めにある人間がどのように死ぬのかを学習することがなくなった。死に対する感じ方は変わってしまった。それで、死を恐れる人が昔よりも多くなったように思う。

いつしかさまざまな延命治療も極度に発達した。老人人口の多いなかの病院などで、十数人も入る病室でほとんどの患者が点滴の管をつけて横たわっているのを観たことがないかね。昔の死に方を知っているわしは、その光景に言葉をのむ。さすがにそれを疑問に思う人も出て来た。ホスピスなどと外国語で言っているが、避けられぬ死を見ないよう

にするのではなく、静かにそれを受け入れる態度を養おうという趣旨だ。つまり、昔の人を見習おうというのである。それが本筋というものだろう。ふたたび、暈の上で往生することがとても貴重なことになった。

さてわしも、天運よろしきを得て、それでも幾日か看取る人に負担をかけるのは心苦しけれども、自分の家で死ぬるものならそうしたい。死ぬのに快適さを求めるのをお許し願って、気候のよい春か秋なら窓を開いて、冷暖房の要る夏か冬なら雪見障子を上げて、（視覚が働いているなら）いつも見ていた小さな庭を眺めながら、最後の息を引き取りたいものだ。

だが、最期に何を思いどんな言葉を発するか、あらかじめ決めることもかなわないこと
で、未だに見極めがつかない。

話者は茶飲み話のように話したが、採録者が自分の身に引きつけて考えてみると、話者のように淡々とした境地になれそうにない。